

## 淀川水系流域委員会 第6回ダムWG 結果概要

開催日時：2004年10月4日（月）13：05～17：20

場 所：ぱるるプラザ京都 5階 A会議室

参加者数：WGメンバー委員19名、WGメンバー外委員7名

河川管理者（指定席）32名、一般傍聴者（マスコミ含む）89名

本稿は、議事の概要を簡略にまとめたものです。詳細な議事内容については、後日公開される議事録をご参照下さい。

### 1. 審議の概要

#### 河川管理者提供資料に係わる検討

河川整備計画の目標に関する意見交換

「既往最大規模」の考え方に関する意見交換

流下能力1500m<sup>3</sup>/s整備に関する意見交換

#### サブWGからの報告と意見交換

ダムWGに関する意見交換

1) ダム代替案とその実現性について

2) 堤防強化について

3) サブWGの検討状況について

3) ダムサブWGに関する意見交換

余野川ダムサブWGに関する意見交換

### 2. 一般傍聴者からの意見聴取

### 3. 今後のスケジュールについて

## 1. 審議の概要

### 河川管理者提供資料に係わる検討

今本委員より本日のダムWGの進め方について説明が為された後、河川管理者から提供資料について説明が為され、意見交換が行われた。

### 河川整備計画の目標に関する意見交換

河川管理者より河川整備計画の目標のうち、特に洪水に関して、河川整備計画基礎案の「4.3 治水・防災 4.3.1 洪水」の「(1) 破堤による被害の回避・軽減」「(2) 浸水被害の軽減」「(3) 一連区間整備の完成等」の説明が為された後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

- ・まず、確認をしたい。狭窄部上流に対しては既往最大規模の洪水を目標にする。狭窄部の下流についてはいかなる洪水に対しても破堤による被害の回避・軽減を目標

にするということによいか（ダムWGリーダー）。

破堤による被害の回避・軽減は、狭窄部の上流や下流を問わず、堤防があるところを対象としている。堤防が壊れると甚大な被害が発生するので、いかなる洪水も対象にした破堤の回避・軽減を目標としている。ただし、現に浸水被害が頻発している狭窄部上流については、浸水被害の軽減のために既往最大規模の洪水を対象にしている（河川管理者）。

- ・「(1) 破堤による被害の回避・軽減」では、目標とする洪水を定めず、いかなる洪水に対しても破堤による被害を回避・軽減するとの説明があったが、目標を定めずどのような具体的な対策が可能なのか。目標がなければ対策のしようがないのではないか。

高規格堤防や堤防補強といった堤防強化対策に加えて、「自分で守る」「地域で守る」「みんなで守る」といったソフト対策も含めた対策を行う。いかなる洪水に対しても破堤による被害を回避・軽減するという究極的な目標は、これまでの流域委員会での議論の中で、委員と河川管理者で意見が一致した考え方だと思っている（河川管理者）。

#### 「既往最大規模」の考え方に関する意見交換

河川管理者より、資料 1-1「既往最大規模の洪水」の考え方について」を用いて説明が為された後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

- ・前回のダムWGで、委員会と河川管理者で「既往最大規模」の捉え方にズレがあり、「既往最大規模」を既往最大流量とするか（委員会）あるいは、既往最大の雨量をいろんな降雨パターンで引き伸ばすか（河川管理者）という点で意見が違っていた。既往最大流量を対象とする方がわかりやすいし、上野地区では河道を掘削して小規模の遊水地を新設すればこれに対応できる。しかし、以前の計画に較べて治水安全度は低くなってしまふ。これでは、地元との経緯を考えれば行政として無責任な話ではないかということで、上野地区については既往最大雨量を対象にさまざまな降雨パターンを用いた検討をしていきたいと考えている。もちろん、だからといってダムが必要だということではなく、遊水地や他の代替案を含めて、どのようなメニューで対応していくかを検討していく（河川管理者）。
- ・「住民の理解が得られないから、既往最大降雨による洪水をさまざまな洪水パターンを用いて検討する」とのことだが、まずは、既往最大規模の洪水を用いた検討をすべきではないのか。さまざまな洪水パターンを用いて検討をするから、委員会と河川管理者の間で混乱が生じているとも言える（ダムWGリーダー）。

「既往最大流量」を対象にするという考え方の他にも「既往最大雨量」という考え方もあるということで、今回の検討結果を示した。今後も、あらゆる降雨について考えていかななくてはならないと考えており、1.1倍から1.5倍まで、0.05

倍単位で計算して評価していこうと考えている（河川管理者）。

- ・我々がまず検討しなければならないのは、既往最大規模の洪水を基準にした検討ではないのか。河川管理者は既往最大規模の洪水を対象にするとおきながら、なぜ、洪水パターンによる引き伸ばしを用いた検討を行うのか（ダムWGリーダー）。

「既往最大規模の洪水」の考え方にもいろいろあり、河川管理者としては、既往最大雨量をとるべきだろうと考えている。資料 1-1 のまとめにあるように、既往最大流量で考えれば、上野遊水地 + 河道掘削 + 新設遊水地で対応可能だが、これまで地元を示してきた計画による効果より小さいので（治水安全度が低くなるので）既往最大流量への対応では不十分であるというのが河川管理者の考え方だ。ただし、だからといって、ダムが必要だと言っているわけではない。あくまでも、対象として既往最大流量では不十分だと言っているだけで、どんな対策があるかはこれから考えていくべきことだと思っている（河川管理者）。

- ・岩倉峡の現在の疎通能力が明らかにされていない。傍聴者からもたびたび指摘を受けているが、河川管理者は、岩倉峡の現在の疎通能力と狭窄部上流の水位流量曲線をきちんと可及的速やかに示して欲しい。

後日、あらためて資料としてまとめて提出する（河川管理者）。

- ・河川管理者によれば、実績流量を用いた対策は過去の計画より治水安全度が低下するとのことだが、そうは思わない。今回の河川整備計画では、従来までの計画とは違って、堤防強化やソフト対策で安全を確保していく等、今までとは違う治水計画を打ち出している。また、従来の計画は治水と利水をメインに立てられたものだが、今回は環境が加えられており、河川管理者の説明も今までと違う説明をしていくべきだ。

- ・「天端 - 余裕高で破堤する」という条件でシミュレーションされているが、仮に堤防を強化したり、矢板等によって堤防の構造を変えれば、余裕高を減らすことができるのか。もし余裕高を減らすことができれば、河道流量は大幅に増えることになり、ダムの議論に大きく関わってくることになる（ダムWGリーダー）。

余裕高は浪やうねりや流下物を考慮して設定しているものであり、これを超えると越水して被害が発生するので、何らかの越水対策が必要になってくる。また、堤防の構造が変化したとしても、現在の基準では、余裕高が小さくなることはない（河川管理者）。

- ・どのような計算式を用いて、既往最大雨量から流量へ変換しているのか。有効雨量の取り方によって計算最大流量は大きく変わるので、有効雨量の決定法を説明してから流量を算定する方法を説明したほうがよりわかりやすい説明になるのではないか。

全流域に過去の実績降雨を降らせて、その時の下流地点の実測流量を見比べながら貯留関数の定数合わせをして計算している。それから上野遊水地より上流

- 端への流入のハイドロを貯留関数法で与えて氾濫解析をしている（河川管理者）
- ・資料 1-1 では、川上ダムからの放流量が  $60\text{m}^3/\text{s}$  となっている。過去のシミュレーションでは、 $150\text{m}^3/\text{s}$  一定放流だった。何故か。  
今回の河川整備計画では、岩倉峡は開削しないとしており、実際に川上ダムから下流へ流せる量（無害流量）は  $60\text{m}^3/\text{s}$  となっている。このため、今回の検討では  $60\text{m}^3/\text{s}$  で計算を行った（河川管理者）
  - ・資料 1-1 P4～6 にかけて施設別氾濫量が示されているが、雨量だけではなく、流量も示して欲しい。
  - ・資料のまとめ方に疑問が残る。「住民の理解は得られない」とまとめられているが、河川管理者は、住民に理解してもらえるような対策を考えて、きちんと説明していかなくてはならないのではないか。このまとめの部分は、次のように変更して頂きたい。「上野遊水地・河道掘削・堤防強化およびその他有効な手段を講じることにより、これまで地元を示してきた計画による効果以上の効果を上げるべく努力します」と変更してもらうよう希望する。

#### **流下能力 $1500\text{m}^3/\text{s}$ 整備に関する意見交換**

河川管理者より、資料 1-2「琵琶湖～宇治川までの流下能力  $1500\text{m}^3/\text{s}$  整備について」を用いて説明が為された後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

- ・洗堰の全閉操作は、宇治川や淀川の洪水対策として、かなりの効果があり、洪水時の全閉操作は不可欠だと考えている。しかし滋賀県にとっては、洪水時に洗堰を全閉することで琵琶湖の水位が上昇していくのは耐え難い。こういう状況においては、 $1500\text{m}^3/\text{s}$  を下げる議論は非常に難しいと思っている。ただ、問題は、塔の島地区の景観にある。現在の景観が良いとは決して思っていない。それを踏まえた上で、 $1500\text{m}^3/\text{s}$  を安全に流すためにどういった対応をすべきか、さらに検討してきたい（河川管理者）
- ・滋賀県が琵琶湖沿岸でどのような開発を行ってきたかを知りたい。そのために、琵琶湖総合開発以前の琵琶湖の水位ゼロの沿岸線と開発後の水位ゼロの沿岸線を比較した資料を提出して欲しい。  
準備したい（河川管理者）
- ・洗堰の操作によって下流域がどういう状況になるのか、たとえば枚方地点のハイドログラフを同時に示してもらえれば、よりわかりやすい説明になったのではないかと思う（ダムWGリーダー）  
宇治地点での洪水軽減効果は本日の説明とおりだが、枚方地点においては、宇治地点ほどのはっきりとした水位低減効果はないのではないかと思う（河川管理者）
- ・今回のシミュレーションは、既往最大雨量を用いたのか（ダムWGリーダー）

今回用いた昭和 36 年 6 月は既往第 2 位。既往最大雨量は明治 29 年だが、シミュレーションに足るデータが不足しているため昭和 36 年 6 月を用いた（河川管理者）。

仮定であっても構わないので、明治 29 年の既往最大雨量で検討してみればよいのではないかと。

いくつかの条件を仮定すれば、シミュレーションできるので、結果を示すことはできる。おそらく琵琶湖の水位が 2m 位に達すると思われる（河川管理者）。

### サブWGからの報告と意見交換

3ダムサブWG、川上ダムサブWG、余野川ダムサブWGのリーダーより、それぞれ資料 2「3ダム関係」、資料 3-1「川上ダムについての検討状況と課題」、資料 3-2「川上ダムの目的と代替案に係わる検討資料」、資料 4「余野川ダムの議論について」を用いて、サブダムWGでの検討状況および検討結果について報告が為された後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り。

#### ダムWGに関する意見交換

##### 1) ダム代替案とその実現性について

- ・仮に委員会が「ダムは好ましくなく代替案で対応すべき」という結論を出した場合、代替案の予算が確保できるのか、憂慮している。論理的にダムが好ましくないという結論が出たとしても、ダムの地元が危険なままだと、委員会として答申するのに大きな悩みを伴う。ダムに協力してきた方々や地元のために、たとえば、地方自治体の管理区間を直轄区間に変更するといった特別な配慮を考慮して頂きたい（ダムWGリーダー）。

流域委員会には悩みとともに審議して頂いていると思っている。河川管理者も同様に悩みながら最終的な結論を出していくことになる（河川管理者）。

- ・ダムをつくるための予算システムは非常にかっちりとして出来上がっているが、ダム撤退や代替案に関する予算や手法については、まだ分からないことが多い。ダム代替案がうまくいかなかったとしても、一体何がネックになってうまくいかなかったのかを明らかにするべきだ。流域委員会は、ダム撤退の手順や手法を明らかにするための良い機会だと思っている。
- ・河川整備計画は今後 20～30 年を対象としているので、代替案に必要な工期も考慮して検討を進める必要がある。
- ・ダム計画の中止した場合の代替案は、きっちり実行してもらおうという前提でなければならない。ただ、代替案の具体的な中身まで委員会で審議することはできないのではないかと。国が責任を持って、国と自治体という枠組みを超えて、自治体としっかり連携したうえで取り組むべきだ。

- ・ダム代替案の実施にあたっては、国土交通省の中で立法を検討してもらっても、代替案を実現して欲しい。
- 2) 堤防強化について
- ・破堤箇所危険というのは、どの程度まで推定できるものなのか。  
破堤の危険性のある区域については地質調査等の結果から示しているが、ピンポイントで示すことは難しい(河川管理者)。  
堤防強化は、ダムの是非にかかわらず、実施すべき対策だ。また、ソフト対策も併せて実施していくべきだろう。
- 3) サブWGの検討状況について
- ・川上ダムサブWGでは、河川管理者から示された代替案を検討し、その結果を示した(資料 3-2)。一方、3ダムサブWGや余野川ダムサブWGでは、課題や問題点が示されているだけで検討の結論がいまだに示されていない。検討時間は限られているので、次回のダムWGまでに、ある程度の結論を出す必要があるのではないかと。  
河川管理者からサブWGの審議の前提となる資料がまだ出てきていないので、検討が進んでいない。現在のところは、単発的な議論とその結論を列記する程度に止まっている(3ダムサブWGサブリーダー)

### 3ダムサブWGに関する意見交換

河川管理者より資料 1-4「塔の島地区の河川整備について」を用いて説明が行われた。

- ・塔の島地区の 1500m<sup>3</sup>/s 整備は、河道掘削ではなく、引き堤で実現して欲しい。天ヶ瀬ダムができる前の塔の島地区の川幅が分かる航空写真を見せて欲しい。  
航空写真については、資料 1-4「塔の島地区の河川整備について」P3~4 で、昭和 36 年頃の航空写真を掲載している。塔の島地区の川幅はそれほど変わっていない(河川管理者)。
- ・洗堰の操作規則変更や 1500m<sup>3</sup>/s の見直しに関して、国や滋賀県、下流域の自治体で議論をしていく方針はあるのか。  
第 2 回ダムWGの資料 4-2 P34 に操作規則制定の際のやりとりについて記載している。操作規則を変更するという事になれば、この手続きと同じように上下流で合意を頂かなければならないのではないかと考えている(河川管理者)。

### 余野川ダムサブWGに関する意見交換

- ・余野川ダムは、猪名川総合開発の中で位置付けられた計画なのか。宅地開発と一体になった計画なのか。  
余野川ダムは猪名川総合開発事業で位置付けられているが、ダム周辺の宅地開発と一体になった計画ではない。猪名川総合開発事業は、ダム事業と河川浄化施設の 2 つによるものである(河川管理者)。

## 2 一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者 4 名より発言があった。主な意見は以下の通り。

- ・ 本日のダムWGの議論を聞いていて、提言を出して時間が経つにもかかわらず、審議がそれほど深化していないと感じた。
- ・ 丹生ダムや川上ダムは水資源機構が計画しているダムであり、ダムの目的から都市開発用水の確保が消えるのであれば、ダム建設は凍結すべきだ。既成事実としてダム建設が進んでいけば、ダム撤退に伴う費用負担の話がまとまらず、大阪府営水道等の利水者がダムから一層撤退しにくくなる一方である。徳山ダムのような「仕方がないからダムをつくる」という最悪の結論になってはならない。治水の結論が出ていなくとも、利水面からダム凍結の緊急提言を行って頂きたい。
- ・ 川上ダム建設に伴う県道の付け替え工事が進んでいる。この場所は川と川に挟まれた地域で生物の宝庫となっている。すぐに中止して頂きたい。
- ・ 河川管理者は資料 1-1 で「既往最大規模」として時間雨量を均一に引き伸ばしているが、全く科学的な手法ではない。既往最大雨量 319mm を記録した昭和 57 年の降雨は、ふた山降雨であったにも関わらず、この総雨量を他の降雨パターンで引き伸ばす方法は明らかにおかしく、恣意的だ。
- ・ 資料 1-4 で示された塔の島地区のフォトモンタージュを見て、ますます塔の島地区の河道掘削は認められないと思った。1500m<sup>3</sup>/s をめぐる上下流の経緯は理解できるが、琵琶湖沿岸の浸水被害に 1500m<sup>3</sup>/s 放流がどれだけの効果があるのか、疑問だ。琵琶湖の水位上昇と被害状況の変化に関する資料で詳細に検討する必要がある。また、資料 1-2 P5 の放流量と水位低減量のグラフがあるが、平成 15 年 11 月 17 日の作業部会の資料 2-2 補足のグラフと違うデータが出ている。何故違うデータが出ているのか、検討して欲しい。この他にも、浸水被害がはじまる水位が +30cm なのか +50cm なのか、許容水位がいくらなのか、琵琶湖総合開発事業の治水計画で設定された水位がいくらなのか等、ダムWGで検討して頂きたい。
- ・ 河川管理者による異常湧水について、いくつかのシミュレーションが示されているが、委員会は条件を変えたシミュレーションをするよう河川管理者に要求して欲しい。現在は、BSL - 90cm を切ってはじめて流量調整を実施しているが、これを - 45cm に変更すれば、ダム以上の効果が出てくる。
- ・ 先日、姉川・高時川川づくり会議が開催され、ダム+河川改修という案以外に、5 つの代替案とそれぞれのコストが示された。ダムの治水コストは幾らなのか、これから投入するだけのコストなのか、整理しておいた方がよい。また、代替案のコストをどのように評価すべきか、ダムWGであらかじめ準備的な議論をしておいた方がよい。

### 3 今後のスケジュールについて

庶務より資料 5 を用いて今後の開催スケジュールについて説明が行われた。 以上